

# 源氏物語

夢の浮橋

紫式部

青空文庫



明けてくれに昔こひしきころもて生く

る世もはたゆめのうきはし (晶子)

薫<sup>かおる</sup>は山の延<sup>えん</sup>曆<sup>りやく</sup>寺<sup>じ</sup>に着いて、常のとおりに経卷と仏像の供養を営<sup>や</sup>んだ。横川<sup>よかわ</sup>の寺へは翌日行つたのであるが、僧<sup>そう</sup>都<sup>ず</sup>は大將の親しい来<sup>らい</sup>駕<sup>が</sup>を喜んで迎えた。これまでからも祈<sup>き</sup>禱<sup>とう</sup>に關した用でつきあつていたのであるが、特に親しいという間柄にはなつていなかつたところが、今度の一<sup>いつ</sup>品<sup>ぽん</sup>の宮<sup>みや</sup>の御病氣の際に、この僧都が修法を申し上げて著るしい効果を上げたのを見た時から、大きな尊敬を払うようになって、以前に増した交情を生じたために、重々し

い身でわざわざこの山寺へ訪ねて来てくれたとしてあらんかぎりのもてなし歎待をした。ゆるりと落ち着いて話などをしてゐる客に湯漬ゆづけなどが出された。あたりのやや静かになつたころ、

「小野の辺にお知り合いの所がありますか」

と薫は尋ねた。

「そうです。それは古くなつた家なのでございます。私に朽くちあま尼

とも申すべき母がありまして、京にたいした邸やしきがあるのでありませんから、私が寺にこもっております間は、近くに来ておれば夜中でも暁でも何かの時に私が役だつことになるかと思ひまして小野に住ませるのでございます」

「あの辺は近年まで住宅も相応にあつたそうですが、このごろは

家が少なくなつたそうですね」

と言つたあとで、薫は座を進めて低い声になり、

「確かなこととも思われませんし、またあなたへお尋ねしましては、なぜ私がそれを深く知ろうとするのかと不思議にお思ひになるであろうしとはばかられるのですが、その山里のお家うちで私に關係のある人がお世話になつていふことを聞きましたが、事実であるとすれば、そうなるまでの経路などもお話し申しておきたいと考えていましたうちに、あなたのお弟子にしていただいて尼の戒を授けられたということが伝わってきましたが、眞実でしょうか。まだ年も若くて親などもある人ですから、私の行き届かない所からなくしたように恨まれてもしかたのない人なのですが」

と薫は言った。僧都は予期のとおりあの人はただの家の娘ではなかつた。貴女きじよであろうとは初めから考えられたことであつた。自身で来てこれほどに言つておられる人であれば、深く愛された人に違ひないと思うと、自分は僧であるにせよ、あまりに分別なくあの人の望みにまかせて出家をさせてしまつたものであると胸がふさがり、返辞をどうすれば障さわりなく聞こえるであろうと考えられるのであつた。事実をもう皆知つておられるらしい、これだけのことがすでにわかっている上で、探りにかかれては何も何も暴露してしまうはずである、隠してはかえつて迷惑が起こるであらうという結論を僧都は得て、

「どういうことでこんなことが起こりましたかと、昨年来不思議

にばかり思われていました方のことかと思われれます」

と言ひ、

「小野の母と妹の尼が初瀬寺はせに願がございまして参詣さんけいいたしました。母の尼が旅疲れで発病いたしましたして、重そうに見えると申すしらせが私の所へあつたものですから、私も宇治へ出かけたのです。そうしますとあちらで不思議なことが起こつたと言ひだしまして、母の介か抱いほうもさしおきまして、妹の尼はどうしてもこの方の命を助けたいと騒ぎ出しました。その若い病人も死人同様になつていました。がさすがに呼吸いきはあつたのですから、昔の小説の殯殿ひんでんに置いた死骸しがいが蘇生そせいしたという話を妹は思い出しまして、そんなことかと

私の弟子の中の祈禱きとうの上手じょうずな僧を呼び寄せましてかわるがわる加持をさせなどしておりました。私は、惜しむべき年齢としではないのですが、旅の途中で病みました母に、正念に念仏もさせて終わらせたいと仏のお助けを乞こうておりましたその人のほうはくわしく見ませんでした。何がそうさせていたかと思ってみますと、天て狗いぬ、木精こだまなどというものが欺いて伴つて来たものらしく解釈がされます。助けて京へ伴つて来ましたあと三月くらいは死んだ人と変わらぬようだったのですが、以前の衛門督えもんのかみの妻でございました私の妹の尼は、一人より持つておりませんでした女の子をなくしましてから時はたつても、悲しみに沈んでおりましたのが、同じほどの年とし恰好かっこうではありまして、非常に美しい人でもある



人を拾うことのできましたのは、観音が自分へ下すつたのだと言つて喜びまして、気も狂わんばかりに私へこの人の命を救えと頼むものですから、私も坂本さかもとへ下つてまいり、その時は私自身で祈祷をし、護身法も行なつてあげました。それから失心状態でも放心状態でもなくなり、次第によろしくなられたのでございませぬが、自身ではまだ憑かれたものの離れてしまわない気がする、これに妨げられずに未来の世界を思うようになりたいと私へ悲しいお話があつたものですから、出家は自分のほうからお勧めもしたいことであるからと申して授戒を行なわせてさしあげたのでございませぬ。あなたに御関係のある方などは、空では悟りようもありませんでした。不思議な出来事なのですから、人にも話せば

捜しておいでになる方の注意を引くことになつたかもしれないの  
でしたが、世間に聞こえては煩わしいことになるであろうと申し  
て、妹の尼はそれをとめましたので、長く秘密にいたしてまいっ  
たのでございます」

こう物語つた。いよいよ事実であつたのかと薫は、小宰相から  
少し聞いた話から山へまで遠く僧都を尋ねて来たのではあるが、  
全然死んだと思つていた人が、確かにこの世に存在していたのか  
という驚きをまたも覚えて、夢の中の気持ちがち、心の打たれた  
ことによつて涙ぐまれるのを、高僧を前に置いてこんな弱さを見  
せるものでないと反省され、冷静なふうを作つていたが僧都には、  
薫の感じていることがわかり、これほどにも愛していた人を、生

きていても死んだのと同じような尼の身に自分はしてしまったと過失をした気になり、罪を作ったという自責も覚えて、

「悪いものに魅<sup>み</sup>入<sup>い</sup>られになったということも前生の約束事なのですよ。必ず高い家の子でおありになったのでしよう。前生のどんなあやまちでさすらいの身などにおなりになったのでしようか」と僧都は問うてみた。

「王族の端とまあいうほどの人です。私も妻として結婚をしたのではありません。あることが動機になって恋愛がそこへまで進んでしまった間柄でした。がしかし、そんなにまで人の好意にすがって養われねばならぬような待遇を私はしていたではありませんのに、不思議に跡かたもなくなってしまうものですから、身

を投げたかなどと、それによつてまたいろいろな想像もしていたわけです。罪の軽くなる御処置をお取りくだすつたのですから、安心のできたことと私は思うのですが、母親である人が非常に恋しがり悲しがつておりますから、それだけには知らせてもやりたく思いますものの、その結果長く隠しておいでになりました尼様の御本意に違い、断ち切れぬ親子の情で訪ねて行つたりすることになるかもしれぬと思われます」

などと薫は言つたあとで、

「御迷惑なことと思いますが、その坂本までいっしょにお下りくださいませんか。細かい事実を承ることができましたあとで、なおそのまま捨てておいてよい人では初めからなかつたの

ですから、夢のようなことを、この話を承った時を機としても話し合いたいと私は思うのです」

こう言う様子に、その人を深く思うことの方がわれるため、出家遁世とんせいの姿になり、髪も髭ひげも剃そった僧たちでさえ恋愛の心のおさえられぬ者があるのである、まして女というものに戒行が保てるものかどうかあぶないものである、かえって罪に墮おとすことに自分は携わってしまったと僧都は煩悶はんもんした。そして、

「下山しますことは今日明日さしつかえます。日が変わりましたらまいります、あちらからお手紙をお差し上げになるように計らいますよう」

こう答えた。薫はたよりない気もするのであったが、ぜひなど

としいることは、にわかにあせりだしたことに見られて恥ずかし  
いと思い、それではと言つて帰ろうとした。姫君の異父弟は供の  
中にいた。他の兄弟よりも美しいその子を大将は近くへ呼んで、  
「これがその人と近い身内の者です。この少年をせめて使いに出  
しましょう、短いお手紙を一つお書きください。私とは初めから  
お言いにならずに、だれか尋ね求めている人があるということをお  
書きください」

と薫が言うのと、

「そのお手引きをいたすことで私は必ず罪に墮おちましよう。事實  
は申し上げたとおりです。もうあなたが今すぐお寄りになつて、  
お話しになることをお話しになる、それは何の罪にもあなたのお

なりになることではありません」

僧都はこう言うのであつた。薫は笑つて、

「あなたの罪になるようなお手引きを願つたと取つておいでになるのは誤解ですよ。私は今日まで俗の姿でありますだけでも怪しいほど信仰を深く持つ男です。少年の時代から遁世の志を持つているのですが、三条の宮様がお一人きりで、私のような者一人をたよりに思召すのが断ち切れぬきずな絆になりまして、そのまま今も世に交わつておりますうちに自然に位などというものも高くなり、自身の意志になつた生活もできないことになりますと、心は仏の道に傾きながら、行為は罪になるほうへ引かれても行つておりましたが、それは公私のやむをえぬことに生じた枝葉ともいうべ

きことです。そのほかではこれは仏の戒めであると教えられましたことは、いささかのこともそれに触れたくないと心がけ、慎んでいまして、心の中は僧に変わりはないと信じる私です。ましてそれは不善のはなはだしいものですから、どうして道にはいった人を誘惑したりすることをしましう。お信じくください。ただ逢いまして気の毒な母親の話などをよくしてやりますことができば私の心が楽になることと思うからです」

と、昔から仏の教えを奉じることの深さを薫かおるは告げた。僧都そうずも道理であるとうなずき、尊い心がけであることをほめなどするうちに日も暮れたため、中宿りに小野へ寄ることはふさわしい道順であると薫は思ったが、突然に行くのはやはりよろしくなからう



と考え、帰ることにきめた時、この常陸ひたちの子を僧都は愛らしいとほめた。

「この少年に持たせてやります手紙に彼女の昔の知人のことをほのめかしておいてください」

と薫が言つたので、僧都はさつそく手紙を書いた。

「ときどきは山へも登つて来て遊んで行きなさい。私にあなたは縁がないのでもないからね」

などとも言つた。少年は縁のあるという理由がわからないのであるが、手紙を受け取つてすぐに供の中へまじつた。

坂本へ近くなつた所で、

「前駆の者は列を分かれ分かれにして声も低くして行くように」

と大将は注意した。

小野では深く繁しげつた夏山に向かい、流れの蛍ほたるだけを昔に似たものと慰めに見ている浮舟うきふねの姫君であつたが、軒の間から見える山の傾斜の道をたくさんたいまつの炬火が続いておりて来るのを見るために尼たちは縁の端へ出ていた。

「どなたがお通りになるのでしよう。前駆の人がたくさんように見えますね。昼間横川よかわの方へ海布めの引乾ひきぼしを差し上げた時に、大将さんがおいでになつて、にわかきようおうに饗応したくの仕度したくをしている時で、いいおりだったというお返事がありましたよ」

「大将さんというのは今の女二によにの宮みやのたしか御良人ごりようじんでいらつしやる方ですね」

などと言っているのも、世間に通じない田舎めいたことであつた。

あの人たちが言うように実際大将が通るのであるうかと浮舟が思っている時に、かつてこれに似た山路やまみちを薫の通つて来たころ、特色のある声を出した隨身の声が他の声にまじつて聞こえてきた。月日が過ぎれば過ぎるほど昔を恋しく思つたりすることは何にもならぬむだなことであると情けなく姫君は思い、阿弥陀仏あみだぶつを讃さんご仰うすることに紛らせ、平生よりも物数を言わずにいた。

薫は常陸の子を帰途にすぐ小野の家へやろうと思つたのであるが、従えている人の多いために避けて邸やしきへ帰り、翌朝になつてから僧都の手紙を持たせてやることにして、きわめて親しく思う人

で、おおぎようにならぬもの二、三人だけを付け、昔も宇治の使いをよくさせた隨身も添えてやるのであつた。聞く人のない時に、その子を薫はそばへ呼んで、

「おまえの亡くなつた姉様の顔は覚えてゐるか、もう死んだ人だとあきらめていたのだが、確かに生きていられるのだよ。ほかの人たちには知らしたくないと思つてゐるのだから、おまえが行つて逢つて来るがいい。母にはまだ今のうちは言わないほうがいい。驚いて大騒ぎをするだろうから、そんなことはかえつて知らない人にまでいろいろなことを知らせてしまうことになるよ。母の悲しみを思つて私はあの人を捜し出すのにこんな骨を折つてゐるのだ。ある時までには口外するな」

といましめるのを聞いて、子供心にも、兄弟は多いが上の姫君の美に及ぶ人はだれもないと思ひ込んでいたところが、死んでしまったと聞き非常に悲しいことであるといつもいつも思っているのに、こんなうれしい話を知ったのであるから感激して涙もこぼれてくるのを、恥ずかしいと思ひ、

「はあい」

と荒々しい声を出して紛らした。

小野の家へはまだ早朝に僧都の所から、

昨夜大将のお使いで小君こぎみがおいでになりましたか。お家のこと

などくわしいお話を伺つて茫然ぼうぜんとなり、恐縮しておりますと

姫君に申し上げてください。私自身がまいつて申し上げたいこ

ともたくさんあるのですが、今日明日を過ごしてから伺います。こんな手紙が尼君へ来た。驚いて姫君の所へ持って来て見せるとその人は顔を赤くして、自分のことが明らかに知れてしまったのであろうか、物隠しをし続けたと尼君に恨まれてもしかたのない義理の立たぬことであると思うと、返辞のしようもなくそのまま黙っていると、

「今でもいいのですから言ってください。恨めしいお心ですね、私に隔てをお持ちになつて」

と恨めしがるのであるが、何がどうであるかの理解はまだできないで、尼君はただわくわくとしているうちに、

「山の僧都のお手紙を持っておいでになつた方があります」

と女房がしらせに來た。怪しく尼君は思ふのであるが、今度のがものを分明にしてくれる兄の手紙であろう、使いでもあらうと思ひ、

「こちらへ」

と言わせると、きれいなきやしやな姿で美装した童わらべが縁を歩いて來た。円座を出すと、御簾みすの所へ膝ひざをついて、

「こんなふうなお取り扱いは受けないでいように僧都はおつしやつたのでしたが」

その子はこう言つた。尼君が自身で応接に出た。持参された僧都の手紙を受け取つて見ると、入道の姫君の御方へ、山よりとして署名が正しくしてあつた。

まちがいではないかということもできぬ気がして姫君は奥のほうへ引つ込んで、人に顔も見合わせない。平生も晴れ晴れしくふるまう人ではないが、こんなふうであるために、

「どうしたことでしょう」

などと言い、尼君が僧都の手紙を開いて読むと、

今朝けさこの寺へ右大将殿がおいになりまして、あなたのことを

お聞きになりましたため、初めからのことをくわしく皆お話しいたしました。深い相思の人をお置きになって、いやしい人たちの中にまじり、出家をされましたことは、かえって仏がお責めになるべきことであるのを、お話から承知し、驚いております。しかたのないことです。もとの夫婦の道へお帰りになって、



一方が作る愛執の念を晴らさせておあげになり、なお一日の出家の功德は無量とされているのですから、もとに帰られたあとにも御仏をおたよりになされるがよろしいと私は申し上げます。いろいろのことはまた自身でまいって申し上げましょう。また十分ではなくてもこの小君が今日のことをあなたに通じてくださるかと思えます。

書面を見れば事が明めい瞭りょうになるはずであっても、姫君のほかの人はまだわけがわからぬとばかり思っていた。

「あの小君は何にあたる方ですか、恨めしい方、今になってもお隠しなさるのね」

と尼君に責められて、少し外のほうを向いて見ると、来た小君は自殺の決心をした夕べにも恋しく思われた弟であった。同じ家にいたころはまだわんぱくで、両親の愛におごっていて、憎らしいところもあったが、母が非常に愛していて、宇治へもときどきつれて来たので、そのうち少し大きくもなっていて双方できょうだい姉弟の愛を感じ合うようになっていた子であると思いつ出してさえ夢のようにばかり浮舟には思われた。何よりも母がどうしているかと聞きたく思われるのであった。他の人々のことは近ごろになってだれからともなくうわさ噂が耳にはいるのであったが、母の消息はほのかにすらも知ることができなかつたと思うと、弟を見たことできつそう悲しくなり、ほろほろ涙をこぼ

して姫君は泣いた。小君は美しくて少し似たところもあるように他人の目には思われるのであったから、

「御姉きょうだい弟だいなのでしよう。お話したく思っていていらつしやることもあるでしょうから、座敷の中へお通ししましょう」

と尼君が言う。それには及ばぬ、もう自分は死んだものどだれも思ってしまったのであろうのに、今さら尼という変わった姿になって、身内の者に逢うのは恥ずかしいと浮舟は思い、しばらく黙っていたあとで、

「身の上をくらましておきますために、いろいろなことを言うかとお思になるのが恥ずかしくて、何もこれまでは申されなかつたのですよ。想像もできませんような生きた屍しかばねになつてお

りました私を、御覧になつたのはあなたですが、どんなに醜いことだつたでしょう。私の無感覚で久しくおりましたうちに精神というものもどうなつてしまつたのですか、過去のことは自身のことでありながら思い出せないでいますうち、紀伊守きいのかみとお言いになる人が世間話をしておいでになつたうちに、私の身の上ではないかとほのかに記憶の呼び返されることをございました。それからちのちいろいろと考えてみましても、はかばかしく心によみがえつてくる事実はないのですが、私のために一人の親であつた母は今どうしておられるだろうとそればかりは始終思われて恋しくも悲しくもなるのでしたが、今日見ますと、この少年は小さい時に見た顔のように思われまして、それによ

って忍びがたい気持ちはしますが、そんな人たちにも私の生き  
ていることは知られたくないと思いますから、逢わないことに  
したいと思います。もし生きておりましたならば今申しました  
母にだけは逢いとうございます。僧都様そうずが手紙にお書きになり  
ました人などには断然私はいないことにしてしまいたいと思う  
のでございます。なんとかじょうず上手にお言いくだすつて、まちが  
いだったというようにおっしゃつて、お隠しくださいませ」  
と浮舟の姫君は言った。

「むずかしいことだと思えますね。僧都さんの性質は僧という  
ものはそんなものであるという以上に公明正大なのですからね、  
もう何の虚偽もまじらぬお話をお伝えしてしまいなすつたでし

ようよ。隠そうとしましてもほかからずんずん事実が証明されてゆきますよ。それに御身分が並み並みのお姫様ではいらつしやらないのだし」

この尼君から聞き、姫君が女によおう王様であつたということにだれも興奮していて、

「ひどく気のお強いことになりますから」

皆で言い合せて浮舟のいる室へやとの間に几帳きちようを立てて少年を座敷に導いた。この子も姉君は生きていたのだと聞かされてきているが、姉弟らしくものを言いかけるのに羞恥しゆうちも覚えて、

「もう一つ別なお手紙も持つて来ているのですが、僧都のお言葉によつてすべてが明らかになつていますのに、どうしてこん

なに白々しくお扱いになりますか」

とだけ伏し目になって言った。

「まあ御覧なさい、かわいらしい方ね」

などと尼君は女房に言い、

「お手紙を御覧になる方はここにいらつしやるとまあ申してよいのですよ。こうしてあつかましく出ていますわれわれはまだ何がどうであったのかも理解できないでおります。だからあなたから私たちに話してください。小さい方をこうしたお使いにお選びになりましたのにはわけもあることでしょう」

と少年に言った。

「知らない者のようにお扱いになる方の所ではお話のしようも

ありません。お愛しくださらなくなつた私からはもう何も申し上げません。ただこのお手紙は人づてでなく差し上げるようにと仰せつけられて来たのですから、ぜひ手ずからお渡しさせてください」

こう小君が言うと、

「もつともじやありませんか、そんなに意地をかたく張るものではありませんよ。あなたは優しい方なのに、一方では手のつけられぬ方ですね」

と尼君は言い、いろいろに言葉を変えて勧め、几帳のきわへ押し寄せたのを知らず知らずそのままになつてすわっている人の様子が、他人でないことは直感されるために、そこへ手紙を



差し入れた。

「お返事を早くいただいで帰りたいと思います」

うといふうを見せられることが恨めしく、少年は急ぐように言う。尼君は大将の手紙を解いて姫君に見せるのであった。昔のままの手跡で、紙のにおいは並みはずれなまでに高い。ほのかにのぞき見をして風流好きな尼君は美しいものと思つた。

尼におなりになつたという、なんとも言いようのない、私にとつては罪なお心も、僧都の高潔な心に逢つて、私もお許しする気になつて、そのことにはもう触れずに、過去のあの時の悲しみがどんなものであつたかということだけでも話し合いたいとあせる心はわれながらもあき足らず見えます。まして他人の

目にはどんなふうに映るでしょう。

と書きも終わっていないで次の歌がある。

法の師のりを訪たづぬる道をしるべにて思はぬ山にふみまどふかな

この人をお見忘れになつたでしようか。私は行くえを失つた方の形見にそば近く置いて慰めにながめている少年です。

とも書かれてあつた。こう詳細に知つて書いてある人に存在の紛らしようもない自分ではないか、そうかといつてその人にも、願わぬことにもかかわらず変わつた姿を見つけられた時の恥ずかしさはどうであろうと浮舟うきふねは煩悶して、もともと弱々しい性質

のこの人はなすことも知らないふうになっていた。さすがに泣いてひれ伏したままになっているのを、

「あまりに並みはずれた御様子ね」

と言い、尼君は困っていた。どうお返事を言えばいいのかと責められて、

「今は心がかき乱されています。少し冷静になりましてから返事をいたしましたしょう。昔のことを思い出しましても少しもお話するようなことは見いだせません。ですから落ち着きましたらこのお手紙の心のわかることがあるかもしれませぬ。今日はこのまま持ってお帰してください。ひよつといたただく人が違っていたりしては片腹痛いではございませんか」

と姫君は言い、手紙は拵ひろげたままで尼君のほうへ押しやった。

「それでは困るではありませんか。あまりに失礼な態度をお見せになるのでは、そばにいる人も申しわけがありません」

多くの言葉でこんなことの言われるのも不快で、顔までも上に着た物の中へ引き入れて浮舟は寝ていた。

主人の尼君は少年の話し相手に出て、

「物もののけ怪しわざの仕業しわざでしょうね。普通のふうにお見えになる時もなく

て始終御病氣続きでね。それで落飾もなすつたのを、御縁のある方が訪ねておいでになった時に、これでは申しわけがないとそばにいて気をもんでおりましたとおりに、大将さんの奥様でおありになったのでございます。それをはじめ承知いたしましたし

て、なんともお詫<sup>わ</sup>びのしかたもないように思います。ずっと御気分は晴れ晴れしくないので、思いがけぬ御消息のございましたことでもたお心も乱れるのでしよう。平生以上に今日はお気むずかしくなつていらつしやるようですよ」

などと語つていた。山里相応な饗<sup>きよう</sup>応<sup>おう</sup>をするのであつたが、少年の心は落ち着かぬらしかつた。

「私がお使いに選ばれて来ましたことに対しても何かひと言だけは言つてくださいますせんか」

「ほんとうに」

と言ひ、それを伝えたが、姫君はものも言われぬふうであるのに、尼君は失望して、

「ただこんなようにたよらないふうでおいでになったと御報告をなさるほかはありませんまい。はるかに雲が隔てるというほどの山でもないのですから、山風は吹きましてもまた必ずお立ち寄りくださるでしょう」

と小君こぎみに言った。期待もなしに長くとどまっていることもよろしくないと思つて少年は去ろうとした。恋しい姿の姉に再会する喜びを心にいだいて来たのであつたから、落胆して大将邸へまいった。

大将は少年の帰りを今か今かと思つて待つていたのであつたが、こうした要領を得ないふうで帰つて来たのに失望し、その人のために持つ悲しみはかえつて深められた気がして、いろいろなこと

も想像されるのであった。だれかがひそかに恋人として置いてあ  
るのではあるまいかなどと、あのころ恨めしいあまりに軽蔑けいべつし  
てもみた人であったから、その習慣で自身でもよけいなことを思  
うとまで思われた。





# 青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 下巻」角川文庫、角川書店

1972（昭和47）年2月25日改版初版発行

1995（平成7）年5月30日40版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月10日44版発行を使用しました。

入力：上田英代

校正：柳沢成雄

2003年3月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 源氏物語

## 夢の浮橋

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>